商店街を拠点に精神障害者の生活を支援
誰もが暮らしやすい元気な地域づくり追求

北海道の元気！NPO訪問

37 NPO法人 日本障害者・高齢者生活支援機構

文・加藤知美

◇ 中島廉売の一角、にぎわう交流施設

映画『居酒屋兆治』（一九八三年公開）で、高倉健さんと大原麗子さんが買い物をするシーンのロケが行われた函館の商店街・中島廉売は、今も昭和期のたたずまいが残り、市民の台所として健在だ。

その商店街の中心近くの通りに面して、「中島れんばいふれあいセンター」がある。空き店舗になっていた製麺所跡を改装し、「ＮＰＯ法人日本障害者・高齢者生活支援機構」が運営する交流施設だ。木造二階建ての約四九〇平方㍍を改修し、広い空間が仕切られ、フリースペースや休憩所、事務所、作業場、会議室、最近できた児童デイサービスの部屋などがひとつ屋根の下に集まり、障害のある人もない人も和気あいあいと働いたり時間を過ごしたりしている。月に二日間、定期的に屋台やライブでにぎわうイベントとして話題の「中島れんばい横丁」もここで開かれる。商店街利用者が無料で休憩できる場所もあり、バリアフリー設計で広々としたトイレは、車いすがUターンできるスペースが確保されている。

◇ 障害当事者による相談活動から事業拡大

日本障害者・高齢者生活支援機構の理事長の能登正勝さんは障害当事者で、現在は二二名の職員のリーダーとして法人運営に責任を持ちながら、中島町商店街振興組合の専務理事も務める。道外の出身だが、大学中退後、社会人として六年間勤めた後、函館に転居して精神障害者の生活支援の活動に没頭するようになった。

活動の母体は、精神疾患当事者一二名により仲間が集まれる場所をつくろうと二〇〇三年に東京で始まった、精神障害者・精神疾患者ネットワーク「めんたる」だ。茶話会を開催して医療・福祉制度などの情報交換をしたり、インターネット上で情報交換をしながら会員を増やした。

二〇〇六年一〇月に能登さんが四代目の代表となり、事務局を兼務して函館に本拠を移し、障害当事者が自らの経験を活かして相談を受けるピアカウンセリングを電話やメールで行った。二〇〇七年、名称を「全国精神障がい者地域生活支援センター」と変更し、ＮＰＯ法人となった。

まず最初に取り組んだのが、精神の病を身近に理解してもらおうと、「地域の人々に支えられて」と題した講演会とシンポジウムの開催だった。市民一五〇人が参加し、精神医療をめぐる様々な立場からの発言に耳を傾けた。その後も相談事業や生活支援情報を掲載した冊子の作成、フリーマーケットの開催などを通じて精神障害者の生活支援を行い、社会参加や地域での交流を広げた。

福祉車両体験、灯油宅配などの事業にも取り組んだが、手弁当での活動のため負担も大きかった。バザーや空き缶・ペットボトル、リングプルの回収を行うほか、助成金を受けたり、北海道コカコー

理事長の能登正勝さん

ラ・ボトリングとの共同事業で自販機の設置により売上の一部を受け取るなど、様々な工夫で活動資金を捻出したが、財政基盤の安定化が大きな課題だった。

◇　商店街との活動連携、共に活性化を追求

能登さんは、青森市中心部の新町商店街の空き店舗を活用して精神障害者が居心地良く過ごす「オープンスペースＳＡＮＮｅｔ青森」の活動に注目していた。商店街の割り箸リサイクルやアンケート調査、買い物の宅配などを請け負うサービスセンター的役割を果たしたり、地域のイベントへ参加することで市民との結びつきが深まり、障害者への理解を促す結果となった取り組みである。

これを参考に、能登さんは函館でも商店街との結びつきをつくって活動を展開していけないだろうかと考え、知人の紹介で中島廉売の商店街振興組合理事長に会い、自分の考えを伝えた。二〇〇八年、商店街の協力により、振興組合の事務所の提供を受けて法人事務所を中島廉売の中に移転することができた。

地域サービスセンターはこだてでの作業の様子。おでん用こんぶに結び目をつくる作業。

そうした計らいへの感謝をこめて商店街活性化イベントを企画した。屋台やライブを交えたお祭り「中島れんばい横丁」を開催し、精神障害者への理解を広めるための交流活動にもなった。手作りで木製の屋台をこしらえて大学生の介助メンバーも参加し、二日間で六〇〇人が来場して大いに賑わい、おでんや豚汁など商店街で調達した食材で調理した料理が販売された。その後も毎月定期的に開催し、これまでに四二回を数え、実行委員会形式での運営もＮＰＯ法人が直接関わることとした。

一方で、障害のある人もない人も共に暮らしやすい地域づくりをさらに進めるためには、財政基盤の強化が必要と考え、事業型ＮＰＯへの移行を決意した。そして、障害者自立支援法に基づく障害福祉サービスで、身体・知的・精神障害者を対象とした就労継続支援Ｂ型の事業所「地域サービスセンターはこだて」を開設し、六名の利用者で事業を開始した。

また、二〇一一年からは定員一〇名の「児童デイサービスわらさんど」を開設した。わらさんどとは函館・恵山地方の言葉で子どもたちという意味。函館の隣町七飯町の養護学校に通う児童らが通い、定員いっぱいとなる日も多い。障害の程度に応じて宿題や遊びなどの活動を支援したり、体操や集団活動を行う。

こうして、朝から夕方過ぎまで、利用者と職員を合わせて五〇人以上が商店街の中で過ごしていることになり、経済効果も徐々に大きくなってきている。利用者の確保も順調に推移し、財政基盤の安定化につながっているが、短期間に膨れ上がった感は否めない。しかし、能登さんによれば、利用者のニーズに一つずつ応えていくことを大事にし、居心地の良い場所をつくることで、仲間と語り合い、一緒に行動し、互いに理解し合えるコミュニティづくりをしていきたいという考え方がぶれることはないという。ただ、早くも施設が手狭になっているのが悩みだ。いずれ新しい施設をつくることになれば、コミュニティビジネス、ソーシャルビジネスの起業を目指す人も集まれるようなスペースもつくりたいと考えている。人が集まることで商店街が活性化し、障害があってもなくても暮らしやすいまちづくりによって地域が元気になるからだ。

児童デイサービスわらさんど。利用者の子どもたちの送迎も行う。

◆　ＮＰＯ法人日本障害者・高齢者生活支援機構
所在地　函館市中島町25－15
ＴＥＬ　０１３８－５１－００２６
ＷＥＢ　http://mental.mls-j.com/